

歩く

筑波大学附属中学校 三年 山崎 未愛

この世に元気で丈夫な体を持って産まれてくる子がほとんどだろう。私も元気に産まれてぐんぐん成長し、歩くのは他の子供より早かった。幼稚園児の頃も運動することが大好きだった覚えがある。今となってはなぜあんなにはしゃいでいたのかよく分からないが、電車の中や道路などで見かける小さな子供は、みんな跳んだり走ったりしてはしゃいでいる。それはきっと運動が好きな表れであり、子供にとっては使命であるといっていだらう。

私には妹がいる。身体障害児だ。今年で十歳になったが未だに一人で歩けたことはなく、座れたことすらない。妹も私と同様に元気でぷっくりした体で、可愛い小さな顔をして産まれてきた。この子もきっと運動が大好きな子で、すぐに歩くようになるだろうと思っていたが、大外れだった。なかなか一人で座れるようにすらならない。私はこのまま見守っていくしかないと思っていたら、母が私に妹が身体障害児であることを告げた。私は体に衝撃が走った。嘘だ、絶対嘘だ。そんなことを心の中で何度も叫び、どうしても受け入れられない自分がいた。そんな中、母が私に告げた時の優しい声が頭をよぎった。その声の裏、そして妹を見守る優しい目の奥からは、どこかもの悲しい思いが伝わってきた。どうしても受け入れられない自分がいたが、受け入れるしかない自分になっていた。その後も絶対に歩けるようになる信じ続け、もう十年もの月日が経っている。

妹は毎日、支援学校に通っている。車椅子に乗り、笑顔で家を出発していくが、帰って来た時はもうぐったりしていてすぐ疲れている。毎日学校で数多くの出来ないことに挑戦し続け、精一杯に努力をして帰ってくるからなのである。さらに妹は、体をもっと自由に動かせるようになるため、歩けるようになるためにリハビリも学校以外に通っている。私はそのリハビリを見に行ったことは何度もある。歩行器を使い、一步一步足を前に出す練習をいつも必死に頑張っている。歩きたいけど歩けない。その思いが強く伝わり、そして何かを訴えているようで私は妹を優しく見守りながらも胸がいつも苦しくなる。一步一步を前に出し、体重を移す。そして次の足を出して前へ進む。これを繰り返して歩くことができる。歩くという行動には

たくさんのステップがある。こんなことは普通は考えないだろう。だが考えることで、より自分の体が自由に動き、簡単に歩くことができるということがあたり前ではないというのが分かってくるのである。さらに、普段の生活の一つ一つの行動に感謝しないといけないということも学ぶことができている。

『障害』という言葉から、世間では「出来ない」「不可能」など否定的なイメージを受け取る人が多いだろう。だが決してそうではないと私は言い切れる。必死に頑張るその姿から受けとれる多くのメッセージがあり、沢山のことを学ばせてもらっている。普通の生活が出来ることの大切さ、あたり前のことが出来ることへの感謝、そして支え合うことの重要性を忘れてはいけない。色々なことを気付かせてくれる妹がいつもいてくれる。

愛する妹よ、ありがとう。